

## ガン細胞が見えますか

「どうです、ガン細胞が見えますか」

暗室の中でぼんやり光る蛍光板に顔を擦り付けながら、透視台に立った患者の痩せこけた腹を押している私の頭上から、当の患者が訊く。村営診療所の小さなレントゲン室である。

昭和四十年頃の胃透視ときたら、十五分も前から濃い赤色のゴーグルを着けて暗闇に眼を馴らしておいて、たつぷりバリウムを飲ませて一杯にした胃をあちこち押さえて、やつと大きなニツシエや陰影欠損を見分けるという具合だった。X線テレビなどまだ日本中どこにも無かったし、だいいち心臓血管外科教室に入局したばかりの私は胃のX線診断の訓練など受けては居ない。もともと大学の医局は「医学研究者」を養成するところではあつても、地域の診療機関が求めている「医者」を養成するところではないという建前で、新米の医者を系統的に訓練するシステムは無かった。

大学病院ではオーベンの後を追いかけて駆け回るだけの新米の大学院生が、突然東北の村営診療所に単独出張を命じられて、やっていることはごまかしの診療であった。毎日が「内科診療の実際」と「約束処方集」と首っ引きの、いわば診療の真似事であった。

真似事が真似事らしく一応出来るのはたった一年ではあるけれど信州の佐久病院で、インターンとして各科で研修させてもらった経験があったからであった。後年、後輩の医学生たちがインターン制度廃止を叫んで運動を始めた時、私には愚かなこととしか思われなかった。生涯に二度とない貴重な実地修練の機会なのに、病院の労働力として只働きをさせられているだけだという一面的な見方しか出来なくて、医学校を出たら直ぐ国家試験を受けさせる、試験を通ったら直ぐに医者として扱えと要求するのは夜郎自大だと思った。相応の手当ては要求すべきであろうが、基本的には見習いだから身分が不安定なのは仕方がない。「医学者」としては勿論、「医者」としても勉強が始まったばかりの時期である。大学に入学以来、最後の国家試験までの数え切れない回数の試験をなんとかくぐり抜けて来たというだけでここにこうして座らせてもらってはいるけれど、風邪ひとつ満足に治したことはない。ヒトの身体について、紙の上の知識の断片は多少持つていても、実地の医療については技術も経験もない。あるのはほやほやの資格だけだった。

そして最も悪いことは、私には患者の気持ちを理解する余裕がちつとも無いことだった。

特有の悪疫質の顔貌を示したその人は、既に県南の大病院で手遅れの胃癌の診断を受け

ていて、最後の数ヶ月を故郷の村で過ごすつもりで帰って来たのである。

彼が私に期待するのは平穩で苦痛の無い終末しかなかった筈なのに、私は当惑の余り、型の如き、そして病者には全く無益な検査を思いつくことしか出来なかった。まさかX線撮影でガン細胞が見えるとはこの人も思っていただろうに（あるいは本当に見えたらいいなと思ってくれたのか）、一切はもはや無益と感しながら若いボンクラ医者の子を立ててくれたこの人の、これは精一杯の皮肉であったのだろうか。

のちに一度だけ往診を請われたことがある。山裾の果樹に囲まれた家の窓際に、盆地一面に広がる青々とした水田を見渡せる大きな木製の寝台を作らせてこの人は寝ていた。既に取り上げることも難しくなっていたが、田圃を渡って来る初夏の風に、涼しげに蚊帳がそよぐ中で穏やかな顔をしていた。

臨終は秋に私の後任が看とつたと聞いた。

見えもしないガン細胞が見えるふりは二度としたくないと念じながら今日まで来たけれど、いつの場合も必ずそうであり得たと胸を張って云えないのが悲しい。

（神奈川県保険医新聞 第一〇二〇号 一九八九年八月一日）